

桐と鳳凰の錦唐織

この錦の着物は「唐織」で、能楽の女形が着る豪華な衣装である。唐織は江戸時代（1603-1867）に盛んに作られたが、これは 17 世紀初頭に作られたものである。

唐織とは、地織に浮織を重ねた能の衣裳と生地の方を指す言葉である。浮織とは、地糸である緯糸の上に補助的に装飾用の緯糸を織り込み、刺繍のような模様にしたものである。

後の唐織は金糸を多用することが多いが、本品は桃山文化時代（1573-1615）らしい落ち着いた作風である。柄は金ではなく、深緑の綾織地に色糸を用いたものである。また、錦の図柄が衣服の上部から下部にかけて帯状に配されているのも、この時代の特徴である。例えば袖の鳳凰は、上段は左向きだが、下段は右向きである。

非常に様式化された能の伝統では、衣装は役柄を示すものである。例えば、赤い地色の唐織は、若い女性の役柄を表す。緑色の地色の唐織は、中高年の役柄を表す。鳳凰と桐をモチーフにした威風堂々たる姿は、高傑な人物を表す。

この唐織は 1974 年に重要文化財に指定された。